

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 吉野 瑞恵^{よしの みずえ}

本論文は『源氏物語』とその重要な先行作品である『蜻蛉日記』とを中心として平安朝の物語・日記文学の生成過程を考究したもので、構成は4編に分かたれた18章から成る。

第1編「心のかたち」は、たとえば死者の魂が遺された肉親を気遣い続けるという文脈で用いられる「天翔ける」という語に着目し、この仏教的他界観に収まらない言葉の使用が「浄土教的な救済によって閉じられることなく、永遠に人間存在の執着の物語を紡ぎ出し続ける」と論ずるように、物語においては「存在がことばを決定するのではなく、ことばが存在を決定する」という観方を基本に据えて、『源氏物語』が〈ことば〉によって物語を織りなしてゆく様相を分析したものであり、本論文全体の前提的考察となっている。

第2編「理念としての皇統」は、まず前半2章で光源氏と藤壺との密通の結果生まれた冷泉帝が理想的な聖代を現出してゆく過程を分析し、冷泉とは対立する皇統である朱雀帝が秋好への恋慕のゆえに伝来の秘宝を秋好に与えたことが、冷泉朝の文化的権威を高めることになったと指摘する。後半2章では、王権を侵犯する恋が光源氏の超越的な聖性と不可分に結びついていたのに対し、その人柄が「男々し」と評される光源氏の息子夕霧も、また宿木巻で帝に婿取られる薫も光源氏の聖性の継承者ではありえないことを論ずる。

第3編「禁忌という発想」は、『伊勢物語』第69段から在原業平と伊勢の斎宮との不義の子が皇統に介入したという伝承が生まれ、これが光源氏と藤壺との不義の子が冷泉帝として即位するという『源氏物語』の結構に生かされたことを論ずる。ただし『源氏物語』は『伊勢物語』よりもはるかに心理描写がこまやかになっているわけであるが、それに関して、本居宣長よりもむしろ賀茂真淵のほうが藤壺の心内に踏み込んだ注釈を付していることを指摘するとともに、のちの『狭衣物語』では、斎王の性格がただ女君の尊貴さを保証するだけのものになっていて、禁忌侵犯から生まれる聖性という光源氏の属性は継承されていないとする。

第4編「日記文学」という文学形態は、『蜻蛉日記』の文学性が高く評価されるようになったのは土居光知・垣内松三・池田亀鑑らの功績によることを明らかにする一方で、「自らと対話する孤独な営み」という近代的な日記の概念が、『蜻蛉日記』上巻序文に「天下の人の品高きやと問はむためしにもせよかし」とあるように、日記を書くことには世の「ためし」とする意味があったことを見失わせた指摘する。

「深層」や「王権」といった言葉の用法がやや曖昧で再考の余地を残すものの、全体の論旨は明快であり、ことに上述のような内容において研究を深化させた功績は大きい。よって審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。